古代ギリシアと星座

われわれのイメージとその実際

名古屋大学人文学研究科博士前期課程
人文学専攻文献思想学繋西洋古典学
D1　小島 敦

Περὶ ἐμοῦ（自己紹介）

- 専門
  - ➢ギリシア文献を中心とした星座の表現
  - ➢前3世紀の文献『カタステリスモイ』での政治的な背景について
    （文献学&文化史&天文学史）

  - ➢モザイク画における魚の描かれ方
    （美術史/考古学&生物学）

NM inv. no. 120177

おことわり

- 2022年に天教でやった「星座の神話とどう向き合うか」という談話会の内容をリサイクルしている部分があります。

（その時のことは、『天文教育』34号をご覧ください。

https://tenkyo.net/kaiho/pdf/2022_09/01paper-1kojima.pdf）

- 「星座の神話」＝「星座の起源譚」と定義します

・今回伝えたいこと

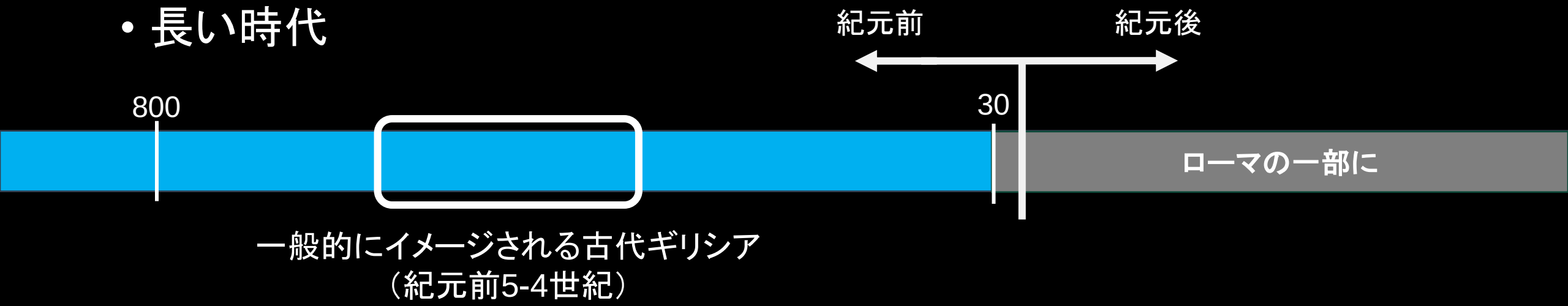
① 古代ギリシアって想像以上に長く時代・広い地域にわたる

② 同一地域でも星座の変移はある

古代ギリシアの一般的イメージ

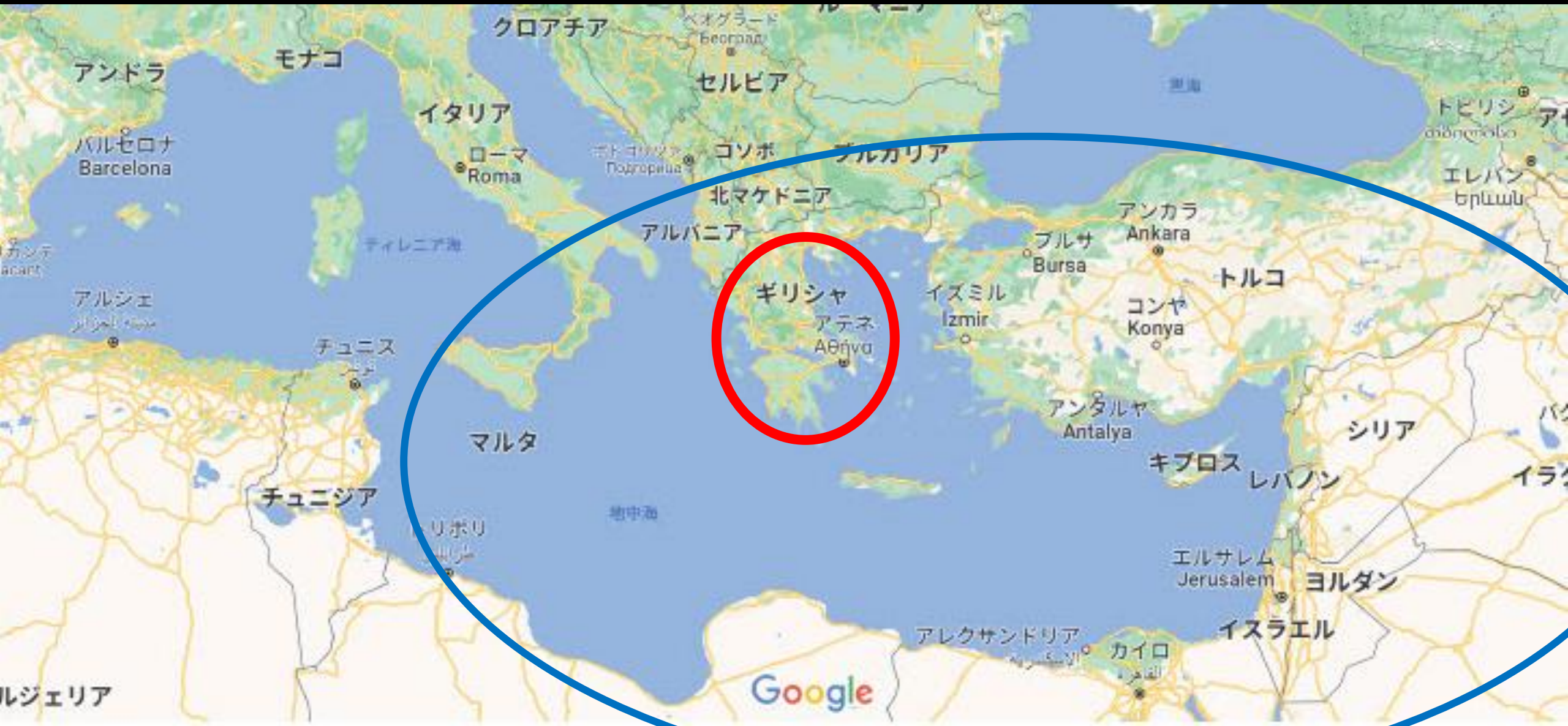
古代ギリシアって…

- 長い時代



- 最古の作品：紀元前8世紀（ホメーロス）
（ギリシアが征服されるのは紀元前30年）
- その後もギリシア語文献は書かれ続ける

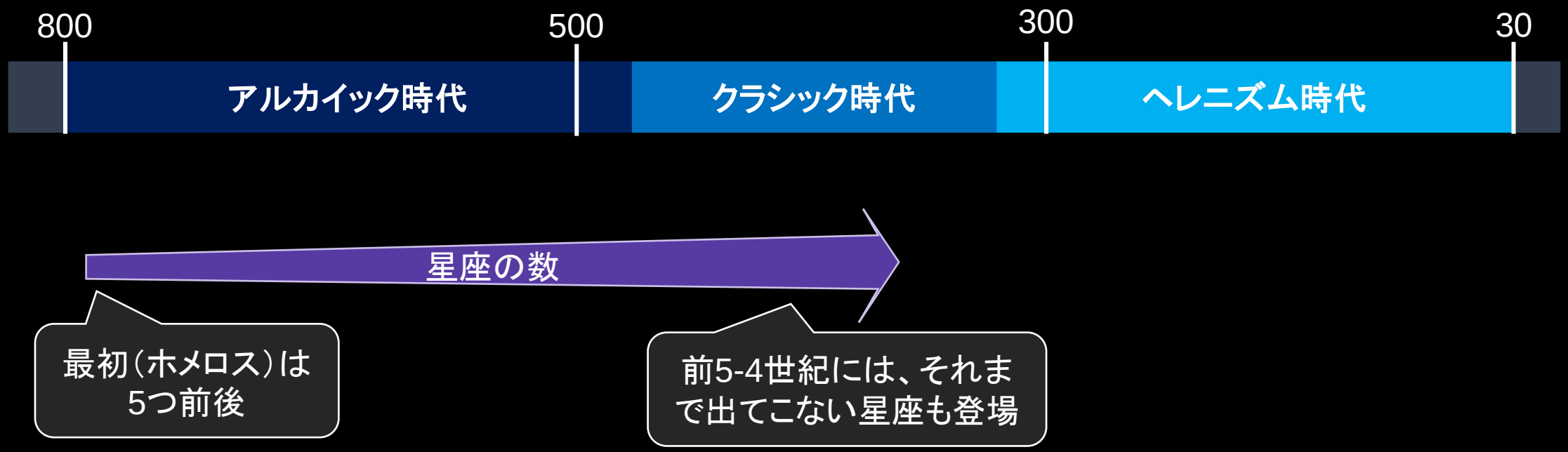
- 様々な地域


クロアチア
モナコ
アンドラ
セルビア
イタリア
バルセロナ
Barcelona
ローマ
Roma
コソボ
ブルガリア
北マケドニア
アルバニア
ティレニア海
アンカラ
Ankara
ブルサ
Bursa
トルコ
ギリシャ
アテネ
Αθήνα
イズミル
Izmir
コンヤ
Konya
アルシェ
チュニス
アンタルヤ
Antalya
マルタ
シリア
キプロス
レバノン
チュニジア
地中海
エルサレム
Jerusalem
ヨルダン
イスラエル
アレクサンドリア
カイロ
トビリシ
エレバン
Google

1. ざっくり星座の歴史 inギリシア
2. ギリシアでの星座の神話
3. アラトス『パイノメナ』
4. エラトステネス『カタステリスモイ』
5. ここまでのまとめ
6. ギリシア（～前4世紀）における星座
7. 季節と星名や星のイメージの関係

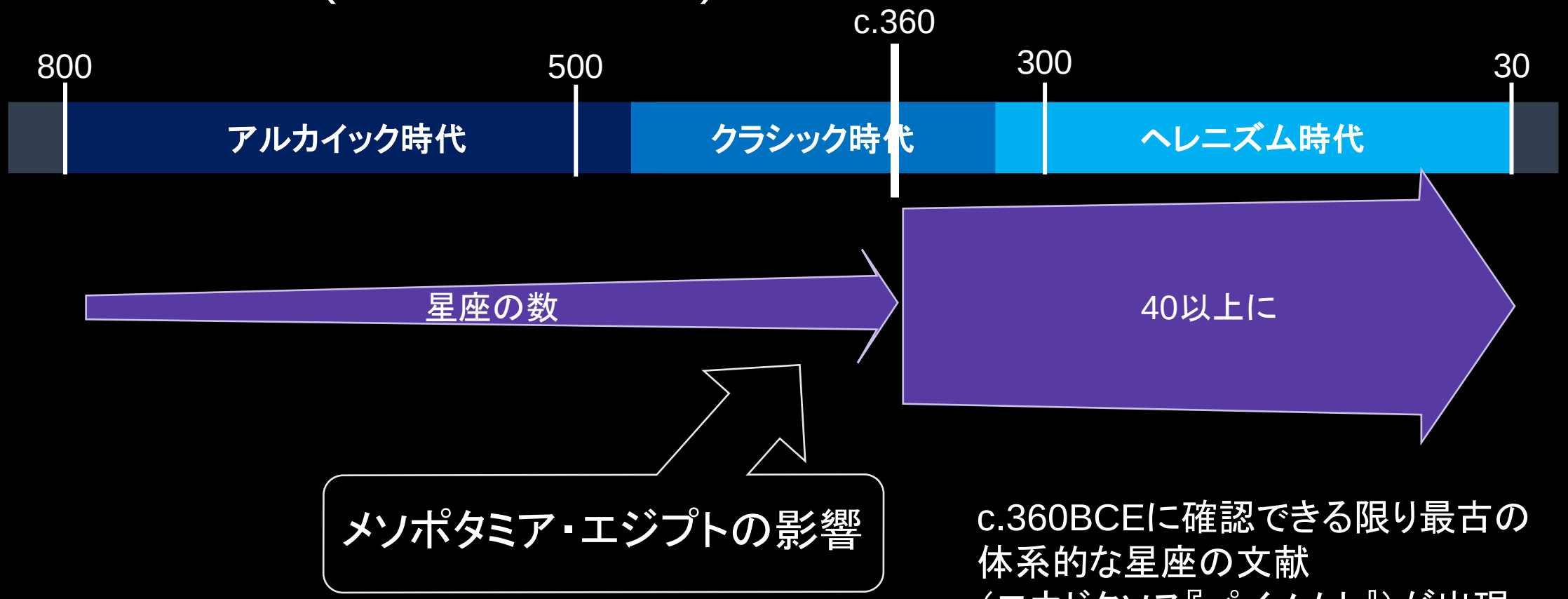
ざっくり星座の歴史 inギリシア

- ざっくり年表(数字は全てBCE)



ざっくり星座の歴史 inギリシア

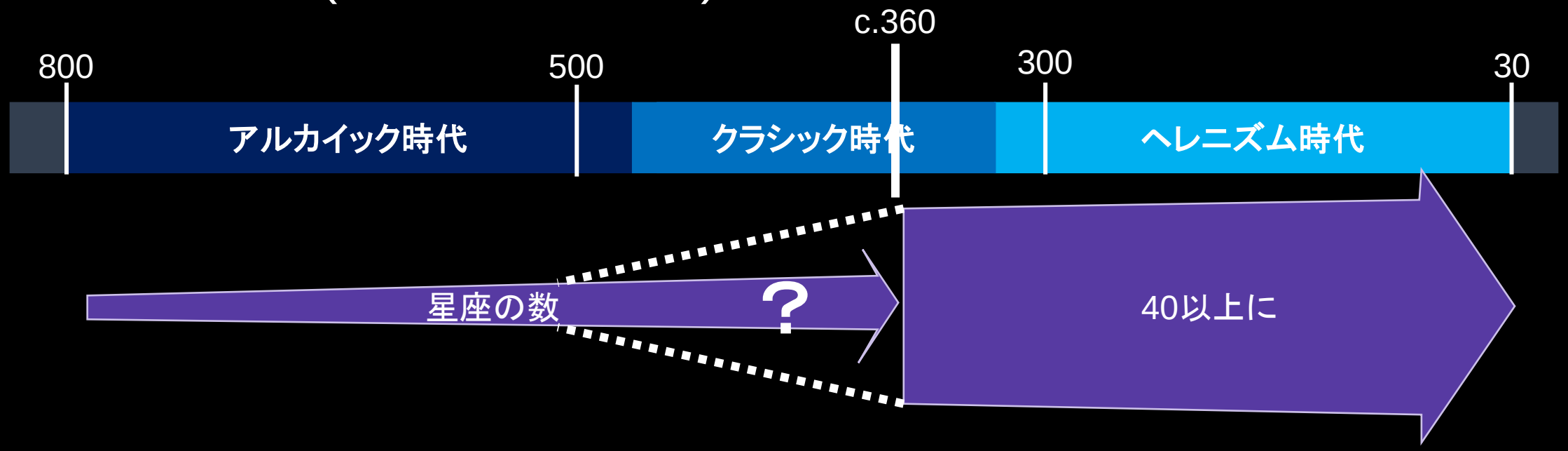
- ざっくり年表(数字は全てBCE)



c.360BCEに確認できる限り最古の
体系的な星座の文献
（エウドクソス『パイノメナ』）が出現

ざっくり星座の歴史 inギリシア

- ざっくり年表(数字は全てBCE)

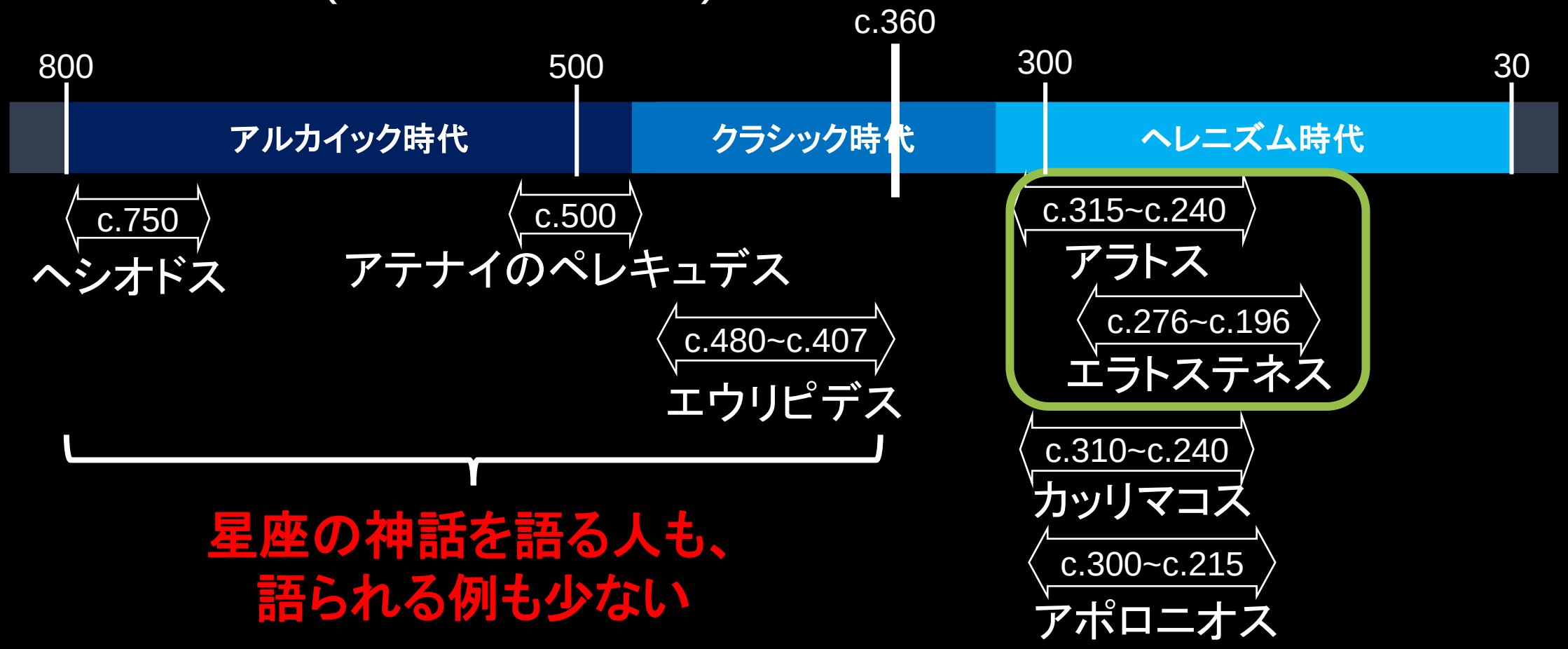


- この変化が段階的なものか、突発的なものかは不明
- 少なくとも前5~4世紀にメソポタミアなどからの影響あり。
- 前4世紀以降は40以上の星座で安定

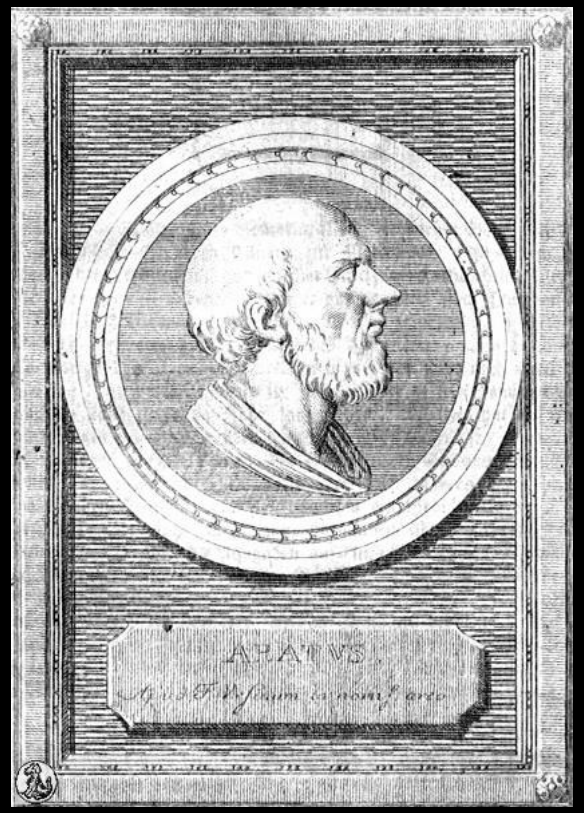
1. ざっくり星座の歴史 inギリシア
2. ギリシアでの星座の神話
3. アラトス『パイノメナ』
4. エラトステネス『カタステリスモイ』
5. ここまでのまとめ
6. ギリシア（～前4世紀）における星座
7. 季節と星名や星のイメージの関係

星座の神話を残す著者 inギリシア

- ざっくり年表(数字は全てBCE)



1. ざっくり星座の歴史 inギリシア
2. ギリシアでの星座の神話
3. アラトス『パイノメナ』
4. エラトステネス『カタステリスモイ』
5. ここまでのまとめ
6. ギリシア（～前4世紀）における星座
7. 季節と星名や星のイメージの関係



アラトス『パイノメナ』

- 日本語訳が刊行済
  伊藤照夫(2007)『ギリシア教訓叙事詩集』京都大学学術出版会

- 「パイノメナ」の意味：
  <u>見られうるものたち</u>
- 当初から超大ヒットな作品

発掘されたアラートスの記念墓
https://www.dailysabah.com/arts/excavations-to-reveal-aratus-tomb-in-turkeys-solipompeiopolis/newsより引用

アラトス『パイノメナ』

- 元ネタの科学書（エウドクソス『パイノメナ』など）=>詩

- 難しい語句がなく、平明な文体
（一般の人にも親しみやすく）

- 専門書というより、教育普及

Add MS 11886（大英図書館所蔵）

『パイノメナ』での星座の神話

- 神話が結び付けられない星座の方が多い（30/47）
- 基本的に1語～4行程度で簡潔（例外：おとめ座は40行; 約3.5%）

そこにはあの冠も、ディオニュソスが逝けるアリアドネの
形見にと定め置いた輝かしい冠は、
労苦に打ちひしがれた人物の下方を回転している。（v.71-73）

彼（ケペウス）の前を旋回するのは非運のカシエペイア（v.188）

*アラートスの邦訳は全て伊藤,2007によるもの

=>アラトスは星座の神話を詳しく記述しない

『パイノメナ』での星座の神話

- この文献で主に述べられる天体の情報は「星座の出没」

  獅子が昇る頃、蟹と共に沈もうとしていた星座は
  すべて没している。そして鷲も。だが、膝を折る人は
  すでにほとんどが沈んでいるけれども、膝と左の足は
  まだ波立つオケアノスの下方へまわりこんではいないのだ。
  昇ってくるのはヒュドレの頭、青みがかった眼の兎、
  そしてプロキュオンと燃えあがる犬の前足。（v.590-595）

- 星座の骨子に決定的な影響

1. ざっくり星座の歴史 inギリシア
2. ギリシアでの星座の神話
3. アラトス『パイノメナ』
4. エラトステネス『カタステリスモイ』
5. ここまでのまとめ
6. ギリシア（～前4世紀）における星座
7. 季節と星名や星のイメージの関係

エラトステネス『カタステリスモイ』

- 「カタステリスモイ」の意味：星座にされたものたち
- 前3世紀頃、大図書館で有名なアレクサンドリアで執筆
- 著者は地球の円周を計算したエラトステネス

- 内容：星座の神話＋星座の図像的説明
- ↑を40以上の星座それぞれで説明（『パイノメナ』とは異なる）

『カタステリスモイ』での星座の神話

伝統的な神話を引用＋星座に変身する部分を付け足し

これはヘラによって星座たちの中に置かれたと思われる。というのも、ヘラクレスが海蛇を殺した時、他のものたちもヘラクレスと共に戦っていたのだが、蟹は湖から飛び出て彼の足を挟んだ。そのようにパニュアシスは『ヘラクレス』の中で述べている。激昂したヘラクレスは足を用いて蟹を粉砕したようである。そのような理由で大きな栄誉を得て、12の黄道星座に数えられている。[...]
（Erat.*Cat*.11; かに座）

*例外もある：e.g.アラトス

=>40以上の星座全てで「星座の神話」を確立

- 星座神話の原典とも言える文献！

ここまでのまとめ

- 古代ギリシア+星座＝星座の神話！というイメージが強いが....
- よく語られるのは紀元前3世紀以降
（一般的な古代ギリシアのイメージより後の時代）
- 体系的に語る現存文献はエラトステネスのみ

- ギリシア神話全体では...
- 星座の起源譚はそこまで大きなウェイトを占めない

ギリシア（～前4世紀）における星座

- エクフラシスのテーマとして
  - Hom.*Il*.18.483-489　盾の模様として
  - Eur.*Ion*.1148-1159　天幕の天井の模様

- 航海の目印（方向を知る）
  - Hom.*Od*.5.272-275　オデュッセウスが星を目印に航海

- 季節の目印（時期を知る）
  - Hom.*Il*.22.25-32　シリウスが刈入れ時に現れる星
  - Hes.*Op*.565-571 etc.　アルクトゥルスやプレイアデスを目印に農耕

暦はなかったのか？

- ギリシアの暦：太陰太陽暦

（7c.BCE頃には既にあったと考えられる）

- 3年に一度閏月で調節

⇔2年目とかは20日ぐらいずれる

- 一年の中で決まったタイミングには星が便利！

=>農耕、祭り、使節の派遣など様々な場面で星座や星が使われた

- 細かなタイミングを計るには小さい方が便利
- 古くから知られる星座や星は小さいのが多い

e.g.プレイアデス、ヒュアデス、シリウス、アルクトゥルス

- 時代が下ると大きくなる傾向あり？

e.g.おおぐま座

北斗七星（ホメロス、アラトス）

→現在に近い形（エラトステネス、プトレマイオス）

季節と星名や星のイメージの関係

- スタキュス（αVir）：穂
- プロトリュゲテル（εVir）：pro（前に）+ trygáō（葡萄を収穫する）
- シリウス：灼熱をもたらす星というイメージ
- オリオン座：*IE*で夏を表す*osarが由来(？)

  *osar => *o[s]ar => *oarios =(別形)> *oariōn => ōriōn => ōrīōn

- 例外中の例外？
- ロパロン（ωHer）：rhopalon(棍棒) => 暗い（4.6等）・季節関係なし

まとめ：一般的なイメージと比較して…

- ギリシア人は星が好き　=>　〇
- 星を使って生活していた　=>　〇
- 沢山星座神語を語っていた　=>　時代による
  - 一般的に考えられる古代ギリシアの時代はあまり残ってない
  - 残る星座神話の文献はそれより後のヘレニズム時代のもの

星座の歴史は地域差や各地域間での伝達が注目されがちだが…

同一地域でも<u>変移がある</u>という考えは必要

参考文献

- 伊藤照夫訳『ギリシア教訓叙事詩集』(京都大学学術出版会, 2012).
- 松平千秋訳『ホメロス　イリアス（上/下）』(岩波書店, 1992).
- ———『ホメロス　オデュッセイア（上/下）』(岩波書店, 1994).
- 中務哲朗訳『ヘシオドス　全作品』(京都大学学術出版会、2013).
- Renaud, J.-M., Le catastérisme chez Homère. Le cas d'Orion, in Gaia, 7 (2003) ps. 205-214.
- Renaud, J.-M., ‘Le catastérisme d'Orion’, Bakhouche B., Moreau A. & Turpin J.-C. (ed.), Les Astres, I, Montpellier (1996) ps. 83-93.